

ウガンダ北部アチョリ地域のいままでとこれから

ウガンダの首都カンパラから車で北上すること6時間、北部の中心都市グル市に到着する。このグル市を擁するグル県に加え、アガゴ、アムル、キトグム、ラムオ、ヌオヤ、パデルの7県を合わせてアチョリ地域と称される。アチョリ族の伝統的居住地域である。

さて、アチョリ地域に触れるに当たり、避けて通れないのが内戦の歴史である。ウガンダ北部は1980年代中盤から20年ものあいだ内戦状態にあった。特にアチョリ地域は反政府軍の非人道的戦闘行為が最も激しく行われた場所である。反政府軍は、登下校中の子供を誘拐し、男児は兵士、女児は家内奴隷(性的虐待を含む)にした。住民には残虐の限りを尽くしたという。国内避難民となった住民は200万人とも300万人とも言われ、彼らは自由の限られた難民キャンプでの生活を余儀なくされた。1980年代半ばから20年ということは、筆者の年齢で考えると、およそ小学生から大学生までの時間が収まってしまふ。同じ時間を少年兵や避難民として奪われた彼らの思いはどれほどのものだったのだろうか。

2006年から反政府軍との和平交渉が開始され、治安が改善すると共に、多くの団体が緊急人道支援に入り、インフラ整備が進み、住民はキャンプから出て元の居住地へと再定住を開始した。

それからおよそ10年。グルの街は活気にあふれていた。暗い過去があるにも関わらず、むしろそれを払拭するように、アチョリの人々は明るく、前向きに生きているのが感じられた。内戦を知らない世代の子供たちが元気に育っている姿目にした。未だ影が残るどこか暗い雰囲気のある街を想像していた筆者には思いもよらない驚きであった。

しかしながらすべてが順調なわけではない。ひとつの問題は農業所得の低さである。アチョリ地域の住民の80%以上は農業に従事していることから、農業セクターは重要な産業である。それにも関わらず、市場に並んでいる農産物は軟弱葉菜類を除けば、ほとんどカンパラやムバレといった県外産ばかりである。市場関係者の話では

「地元の農産物は品質が悪いので取り扱わない」とのこと。

その原因の一つが農家の技術と経験不足である。住民は再定住を果たしたものの、長い難民生活で農業経験は少なく、伝統的な農業技術も、またそれを知る人材も戦火と年月によって失われていた。訪問した農家でも、栽培は粗放で、お世辞にも上手に作っているとは言えない圃場であった。農家が怠慢なのではない。どうしたらいいのかわからないのである。

アチョリ地域の農業生産ポテンシャルは高い。まだ手付かずの農地が多く、土壌は有機質に富んでおり、柔らかい。土地は平坦で広い。自然環境も年間を通じて平均最高気温29℃、最低17℃と好適で、降水量も年間1,500mmと比較的豊富である。また市場には県外産があふれているということは逆説的に、地元でよいものを作れば売れるということである。加えてウガンダは大量の野菜を南スーダンの首都ジュバへ輸出しているが、アチョリ地域はその幹線道路上に位置していることから、輸出も視野に入れた販売展開も考えられる。

アチョリ地域への緊急支援は終わったといって差し支えないだろう。緊急人道支援を担ってきた団体はすでに撤退している。しかしながら、アチョリ地域の発展と住民の生計向上はまだこれからである。

筆者はこれからこの地域に関わることになる。農業環境も良い。市場もある。人々はエネルギーと笑顔にあふれている。ポテンシャルは充分。アチョリのこれからの楽しみである。



笑顔にあふれるマーケット



野菜のほとんどは県外産



トマト圃場。丁寧に管理しているが、施肥や誘引はしていない。



圃場を見ていると近所の人が集まってきた。関心は高い。

(2016年1月 澤田)



ウガンダにおけるアチョリ地域の位置：

図は Wikipedia より引用。この地図は2006年以前ののものであり、グル県、キトグム県、パデル県のみ記載されているが、2006年以降、この3県は分割され、上記7県になった。2016年7月にはさらにグル県が分割され、オモロ県が新設予定。アチョリ地域は8県となる。ウガンダの面積は日本の本州ほどであるが、100以上の県が設置されている。